



はじめに

アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター(略称: アイサ)は、2012年6月、社会福祉法人グロー内に開設しました。アイサでは、障害のある方の芸術文化活動に関わる相談支援活動や人材育成、ネットワークづくり、発表等の機会の確保、情報収集・発信などを行っています。

今年度アイサでは、「より多くの障害者が芸術文化活動に取り組むことができる」「障害者が芸術文化活動に主体的に参加できる機会が増える」「障害者の芸術文化活動に従事する人・団体がより質の高い芸術文化活動の支援を行うようになる」「地域に障害者の芸術文化活動を応援する人が増える」という4つの大きな目的に向けた事業を計画し、実施しました。現状やニーズを知るために、舞台芸術活動団体の訪問調査を昨年に引き続き実施。滋賀県施設・学校合同企画展やオンライン発表会は、発表の機会であるとともに学びや交流の場となることを目指しました。また、芸術活動を支援する方や芸術活動の支援に関心のある方に向け「アイサ大学」と称した研修会も実施しました。

本報告書は、アイサが今年度実施したそれらの事業の目的や内容、振り返りを、取り組みごとにまとめました。また巻末には、今年アイサが出会った方々を紹介しています。

本報告書が障害者の芸術文化活動とその支援現場で役立てられることを願っています。

2022年3月

社会福祉法人グロー (GLOW) ～生きることが光になる～
アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター

アール・ブリュット インフォメーション & サポートセンターについて

(略称：アイサ)

ART BRUT INFORMATION & SUPPORT CENTER
滋賀県障害者芸術文化活動支援センター*

アイサは2012年に誕生しました。障害のある人やその家族、福祉施設、美術館や文化施設等からの相談や問合わせを受け、必要な情報を提供する等の支援を行っています。障害のある人の権利が保護されるための助言や、活動に関わる(関わろうとする)人と人とが信頼関係を持ってつながるための支援を行うことで、障害のある人が安心と希望を持って美術・舞台表現活動に取り組める環境づくりを進めています。

* 滋賀県障害者芸術文化活動支援センター

2017年から「障害者芸術文化活動普及支援事業」(厚生労働省補助事業)が実施されています。障害のある人が芸術文化を享受し、多様な活動を行うことができるように、地域における支援体制を全国に展開する事業です。アイサを運営する社会福祉法人グロー(GLOW)は滋賀県の障害者芸術文化活動支援センターを担っています。

相談

Consulting



作品や展覧会をつくること、発表すること、観ることなどに関する相談支援を行っています。より専門的な見地からの情報提供や支援を行うため、弁護士や美術館学芸員、アーティストなどの専門家に外部アドバイザーとして協力を依頼しています。

研修会の開催

Workshop



障害のある人の美術や舞台表現を支援する人、活動に関心のある人たちを対象に研修会を開催しています。展示や舞台公演づくりに必要な技術研修、著作権など作者の権利保護に関する研修、鑑賞支援に関する研修などを行っています。

ネットワークづくり

Network



障害のある人、その家族、福祉関係者、美術や舞台の専門家、地域の人びとなど、分野や領域を超えたつながりをつくることを目的とした活動を行っています。地域で舞台芸術活動に関わる人たちが情報交換を行う「パフォーマンス・ネットワークミーティング」のほか、滋賀県施設・学校合同企画展(ing展)や研修会なども交流の機会となっています。

情報発信

Information



アイサのウェブサイトでは、研修会や作品公募、展覧会や発表会など障害のある人の表現活動に関する情報を発信しています。滋賀県内で開催されるものに限らず、全国の情報を掲載することでより多くの人に参加し、関わることができればと考えています。アイサが開催した研修やイベントについてはレポートでその内容を紹介しています。

発表の場づくり

Presentation



障害のある人の美術や舞台表現等を発表する場づくりを行っています。ing展はボーダレス・アートミュージアムNO-MAを会場に、滋賀県内の障害福祉施設・特別支援学校等が参加する展覧会です。コロナ禍においても発表の場を確保するため、オンライン発表会として「あ〜！いっさ！！」を企画。ダンスや楽器演奏など舞台表現の発表の場として開催しました。

1 アイサ大学

もくじ

1	はじめに	
2	アイサについて	
4	もくじ	
5	1 アイサ大学	 
10	2 第18回滋賀県施設・学校合同企画展 ing…～障害のある人の進行形～	  
14	3 あ～！いっさ！！	 
16	4 調査	 
18	5 情報発信	
19	6 相談	
20	7 協力委員会	
23	1年を終えて	
24	アイサが出会った人びと	

●本文中の略語について

アイサ：アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター（障害者芸術文化活動支援センター）の略称
 NO-MA：ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
 施設・学校合同企画展または ing 展：第18回滋賀県施設・学校合同企画展 ing…～障害のある人の進行形～
 実行委員会：第18回滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会

●本文中の表記について

障害福祉サービス事業所等の利用者について、利用者さん、ご利用者、利用者様等、様々な表現があるが本書では利用者に統一

目的

今年度は「アイサ大学」と称し、舞台芸術について体系的に学べる全4回のコースと、作品展示の方法や作者の権利保護について学べる美術コース、計6回の研修を企画しました。障害のある人の芸術活動を支援する方や関心のある方が、必要な知識やスキルを身につけ、それぞれの事業所等で学びを生かした障害者の芸術文化活動に取り組めるようになることを目的としています。

開催概要

【舞台芸術コース】

第1回 障害のある人の舞台芸術の魅力を知る

日時：8月26日(木) 14:00～16:00 | 会場：ひこね市文化プラザ メッセホール
 講師：清水美紀(打楽器奏者)、小暮宣雄(京都橘大学名誉教授)

第2回 舞台芸術の鑑賞サポートについて

日時：9月29日(水) 14:00～16:15 | 場所：ピバシティ彦根 研修室
 講師：山上庄子(Palabra[パラブラ]株式会社)、持丸あい(バリアフリーナレーター)、長尾博(滋賀大学非常勤講師)、徳居千鶴子(元盲学校理療科教諭)、藤井佳子(滋賀県立視覚障害者センター)、美濃部裕道(NPO法人CILだんない)

第3回 舞台制作を学ぶ

日時：10月27日(水) 14:00～16:00 | 場所：ひこね市文化プラザ 第3研修室
 講師：白崎清史([公財]びわ湖芸術文化財団 滋賀県立文化産業交流会館)、西田光賜(舞台監督)

第4回 権利について学ぶ (美術コース・舞台芸術コース合同実施)

日時：12月2日(木) 14:00～16:00 | 場所：ひこね市文化プラザ 第2研修室
 講師：平塚崇(北天津きぼう法律事務所 弁護士)、小暮宣雄(京都橘大学名誉教授)

【美術コース】

作品の魅力を伝える展示とは

講師：安川雄基(アトリエカフエ)、NO-MA 学芸員

●湖東エリア

研修日時：10月26日(火) 11:00～16:00 | 成果展示公開：10月27日(水)～31日(日) 9:00～22:00
 場所：ひこね市文化プラザ 第3研修室・展示ロビー

●湖西エリア

研修日時：11月19日(金) 11:00～16:00 | 成果展示公開：11月20日(土)～23日(火) 9:00～17:00
 場所：たいさんじ風花の丘 多目的ホール



美術コース

美術コース 作品展示研修 「作品の魅力を伝える展示とは」

作品展示研修では、展示の基礎を学ぶ座学、作品展示の実践を組み合わせ実施しました。

前半はNO-MA学芸員と、空間デザイナーの安川雄基さんが「作品の魅力を伝える展示とは」をテーマにスライドや実体験などを交えた講義を実施。その後、参加者が持参した作品を並べて、制作過程やどんなところを見て欲しいか発表したり印象について意見を出し合う時間を持ちました。

後半は持参した作品の展示作業を行いました。壁にかけるのか台に置くのか、隣り合う作品との関係はどうか、空間をどう生かすか。参加者が互いに相談し、作業を手伝い合いながら、小さな展示会場を全員で作りました。成果展示として一般の方にも数日間公開しました。

舞台芸術コース

●第1回 障害のある人の舞台芸術の魅力を知る

参加者の自己紹介に始まり、アイサの訪問調査(p16参照)から滋賀県内で舞台芸術活動を行う団体やその活動状況を紹介します。滋賀県内で活動する「スキップハート」(ダンス)とのダンス体験は感染拡大の状況から出演見合わせとなり、映像で紹介しました。後半は清水美紀さんと小暮宣雄さんによるパネルディスカッションを実施。清水さんが長年かかわっている「糸賀一雄記念賞音楽祭」に出演するワークショップの取り組みについて紹介いただきました。

●第2回 舞台芸術の鑑賞サポートについて

山上庄子さんによる、舞台公演の鑑賞サポートについての講義を行いました。特殊な機材を使うだけでなく、「筆談できます」と明示するなど、できるところから取り組むことが大切と語ってく

れました。

後半は実践編として、音声ガイド制作ワークショップを行いました。講師はバリアフリーレーターの持丸あいさん。写真や演劇公演の映像を見て、それを言葉だけで伝える体験です。全盲の長尾博さんと徳居千鶴子さんに、「それではまだ説明がわかりにくいな」「全体から言ってもらえるとわかりやすい」など率直な意見をいただきました。締めくくりにパネルディスカッションには、徳居さん、長尾さんに加え藤井佳子さん、美濃部裕道さんが登壇。障害のある人の鑑賞体験やサポートをテーマに意見を交わしました。

●第3回 舞台制作を学ぶ

実際に舞台公演を作るために必要な手続きや、準備、人員配置の大切さなどを講師の西田光賜さんから学びました。その後、バックステージツアーを実施。舞台上の設備や音響ルームなどを見学しました。後半は、白崎清史さんをお招きして、障害のある人が参加する舞台制作についての事例報告を行いました。

●第4回 学びの共有

4回の研修を通して印象に残ったことや、考えたこ

とを共有するグループワークを行いました。互いの言葉に頷きあったり、誰かの思いに反応して語りたいたことが溢れてきたりと話が尽きないようでした。小暮宣雄さんは、「この連続研修は、体系的に学ぶ場づくりの第一歩になる」と本研修全体を振り返りました。

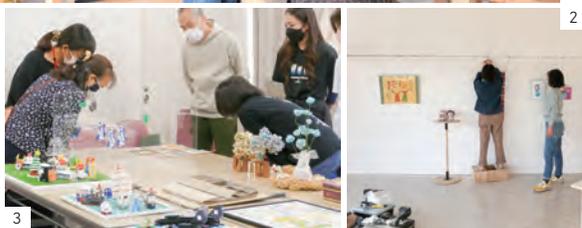
美術・舞台芸術コース共通 権利について学ぶ

美術作品のみならず、舞台芸術においても知っておきたい「著作権」について、平塚崇弁護士による講義を実施しました。

「著作権」はよく耳にする言葉ですが、法律そのものは専門用語が多く、一般には理解しづらいものです。著作権とはどういうものなのか、障害のある人の作品を扱う際に大切なことや演劇作品における脚本の著作権についてなど、具体例を上げて説明くださいました。また、コロナ禍で増えた映像配信において注意することなどにも触れ、著作権が身近なものであることを学びました。



1
2



3
4



1.2 湖西エリア講義の様子 3.4 湖東エリア展示作業の様子



共通「権利について学ぶ」の講義の様子

共通

舞台芸術コース



1.第2回、2.第1回、3.第4回、4.第3回の様子

美術コース

- ・完成した作品だけでなく、作品をつくるプロセスにも焦点を当てた展示が大切であると学ぶことができました。
- ・作品を展示するにあたって、“その魅力をどう伝えるか”が本当に大切なことだと思いました。
- ・観る人に想像の余白を残し、印象付ける展示をこれからも勉強していきたいと思います。
- ・はじめはバラバラに見えたものが、分類・整理することで見やすくなり、(作品がより)魅力的に見えることがわかりました。



参加者のこえ

て、度々「どうするか？ 処分するか？」という議論になっていたため、参考になりました。

- ・作品を作った障害当事者に、作品が展示後どのように取り扱われているのかわかりやすく説明する必要があると感じました。
- ・「権利」についてはすごく難しいなと思いました。(知らないうちに法律に触れていたり、守っていたり…)今回は自分にとって思いがけないくらい刺激になりました。

【全体を通して】

- ・違う立場(職業あるいは障害のある人)の方々とは直接接することが出来、視野が広がりました。
- ・広く浅く知っていく内容であり、知見は広がったように思いましたが、具体的な一歩につなげるためには難しさを感じました。
- ・自分の見えている世界がいかに狭いのかの気づきがあり、実際に音声ガイドを作ったり、障害を持った方のお話を聞いて、とても視野が広がったように思います。対話すること、違うことがあるからこそ、広がっていけること、新たな可能性があることに希望を感じました。

振り返り

舞台芸術コースは定員を超える申込があり、予定より多くの方に参加していただきました。参加者は、障害のある方との表現活動に関わっている方や関心のある方が多く、障害福祉サービス事業所や文化施設のスタッフ、学生等、様々な立場から参加がありました。今回の研修は、舞台芸術活動に関することを網羅的に学べるような内容となっており、自分が携わる現場、関わる活動に何か生かせることができればという思いから参加していただきました。

コロナ禍での開催であることもふまえて、研修時間は各回2時間程度としました。限られた回数のなかで様々な内容を盛り込んだ研修は、網羅的に学べる一方で、幅広い層の参加者、個々のニーズに応えきれなかったと感じています。「第2回の鑑賞サポートの研修に重点を置いて複数回で開催するとよい」「知見は広がったが、具体的な実践につなげるのは難しいと感じた」という意見もあり、各回の内容をさらに掘り下げ、より詳しく学べる場が求められていることを感じました。

第4回でグループワークを実施し互いの思いや感じたことを共有できたことは、学びに広がりが出て、異なる立場の参加者が集まっていたからこそ、新たなネットワークが生まれました。時間を過ぎててもまだまだ続く話し合いの様子から、毎回丁寧に学びを共有することが、より強いネットワークの形成につながると感じました。

美術コースは福祉施設の支援者を中心に、家族や自身が作品作りをしている方も参加されました。作品を持ち寄り、実際に展示してみるという流れで展開することで、具体的な展示方法の学びになりました。また、持ち寄った作品について参加者同士で感想を伝え合い、話し合いながら展示することが出来ました。参加者からは「展示には正解はないけれど、魅せ方があるということが印象的でした」など、気づきや学びにつながったという声が多く、それぞれの現場の取り組みにつなげられる内容となりました。

「知識や技術を身につける」ことを目的に実施しましたが、研修への参加者のニーズは様々です。どちらのコースも限られた時間のなかで技術を身につけることまでは難しい一方、気づきを生み、新たな知的好奇心を呼び起こすことにつながりました。研修の意図を明確にし、研修実施にあたってはそのことをわかりやすく示すことが大切です。また、参加者同士が交流する時間を取ることが出来、人と人がつながる場ともなるような持ち方で実施していきたいと考えます。

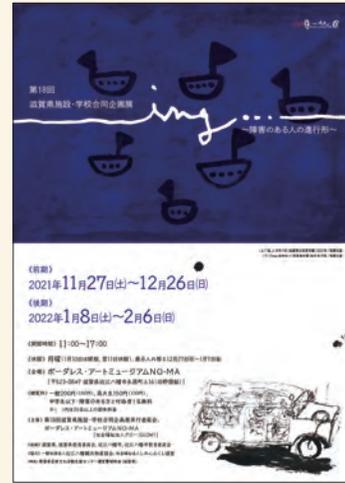
2 第18回滋賀県施設・学校合同企画展 ing…～障害のある人の進行形～



目的

本展は、県内の障害福祉施設の支援員や特別支援学校の教員等と、NO-MAが実行委員会を組織し、企画・展示を行う展覧会です。障害のある人に日々寄り添う支援者ならではの目線で、作者個人、作品一つ一つの魅力を引き出す展示を構成します。

障害のある人が作品を創造し発表する機会を生み出すことや、造形活動を担当する支援員および教員の交流を図ること、より質の高い支援を行えるようになること、また本展の取り組みを発信することで障害のある人の芸術活動への社会の関心を高めることを目的としています。



開催概要

前期：2021年(令和3年)11月27日(土)～12月26日(日)

後期：2022年(令和4年)1月8日(土)～2月6日(日)

会場：ボードレス・アートミュージアムNO-MA

出展：[前期] 愛育苑、あそしあ、伊香立の杜 木輝、滋賀県立近江学園、甲賀福祉作業所、しあわせ作業所、

ステップアップ21、滋賀自閉症研究会たんぼぼ、バンバン、救護施設ひのたに園、Bone Labo

[後期] 社会就労センターあおぞら、障害者支援事業所いきいき、オリーブのねっこ、湖南ダンスワークショップ、

さくらはうす、滋賀県立信楽学園、信楽青年寮、放課後等デイサービス第2ももスマイル、にっこり作業所、

能登川作業所、彦根学園、ふくらの森、滋賀県立野洲養護学校

協力施設：放課後等デイサービスじょいなす

アドバイザー：野原健司(美術家)

ギャラリートーク：前期 2021年11月27日(土)13:30～15:00

後期 2022年1月8日(土)13:30～15:00

いずれもオンライン配信

常設ワークショップ：みんなの名前で作品作り/この日の日記を描こう

出展者：30名

総入館者数：662名

振り返り

今年度は、県内26の福祉施設や特別支援学校等が参加し、30名の作者による作品を紹介する展覧会となりました。展覧会に出展するのはこれが初めてという作者もおられ、県内の障害のある方の作品の魅力を発信する機会となりました。

2021年6月～2022年2月にかけて開催した実行委員会では、持ち寄った作品の魅力について話し、展示する場所や展示方法を協議し、開催中にどのようなイベントがあるかとか意見を話し合い、展覧会を作ってきました。ing展は、障害のある方の作品を発表するだけでなく、実行委員会が展覧会を作るプロセスを学ぶ場、そして、ネットワークを形成する場にもなっています。

展示協議では、「どんなふうに展示しようか迷っている」という委員に、「こういう部分を見せるといいんじゃないか」「こんな風に展示するのがいいかもしれない」と他の委員からいろいろな意見が寄せられました。アドバイザーとして参加いただいた美術家の野原健司さんや、NO-MAの学芸員のアドバイスも受けながら、展示台の高さや額の色など、細かい部分まで検討し図面を作成しました。実際に展示するときには、図面を元に高さや、間隔、照明やキャプションの位置など、計画どおりでよいかを考えながら展示しました。作者本人が展示設営に参加された施設もあり、実行委員からは、「他施設の工夫している点や作品に対する思いなど知ることができ、大変勉強になりました」「展示する場所・高さ・角度などで作品の見え方、見方が変わることを学びました」などの声が聞かれました。

展覧会終了後の最後の実行委員会では、「事業所の利用者の作品を“アート”と捉えることについて」をテーマにグループワークを実施しました。昨年から続くコロナ禍の下での開催となり、実行委員会は時間や回数を減らし、広い会場で、または2グループに分かれるなどの対策を講じて実施してきました。展覧会の準備を進めるための協議を優先せざるを得ないこともあり、委員同士で思いを語り合う時間を十分に持つことができませんでした。最後に振り返りも兼ねたグループワークを実施したところ、委員からは、「今回のように考え方や発想などを共有できる機会があると、よりよい展覧会になると思います」という声もありました。今後も、県内の福祉施設等で創作活動を担当する支援員が集まり、学び、語り合うような機会を作りながら実施することが大切であると感じました。

作品の魅力をどう伝えたか

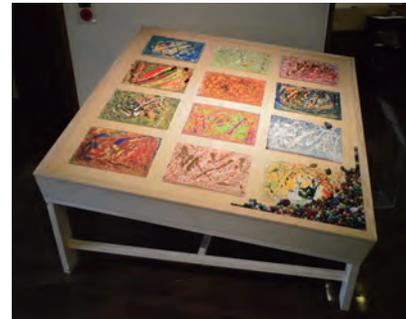
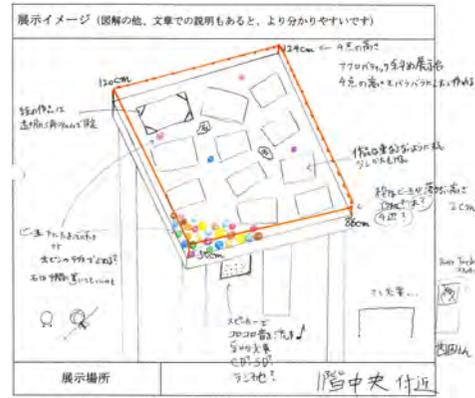
実行委員会で協議を重ねながら、各委員が展示イメージを作成し、展示作業まで行うのがing展の特徴です。第18回展から3つの展示を、展示計画とともに紹介します。

「これ」

2020～2021年 鈴木貴博

実行委員：向畑健太郎、原田佳典(伊香立の杜 木輝)

ビー玉や小石に絵具をつけ、それを箱の中で何度も転がすことで出来上がった作品です。実行委員のお二人はその制作過程も伝えたいと思い、今回の展示方法を考えました。大きな展示台を箱に見立て傾けた状態を再現。作品と併せて制作に使用したビー玉や小石も展示しました。さらに、作者が作品を制作するときの「音」も展示しました。展示台の裏に設置したスピーカーからは、作者がビー玉を転がす「ゴロゴロ」という音と、作者自身の声が流れてくる展示となりました。

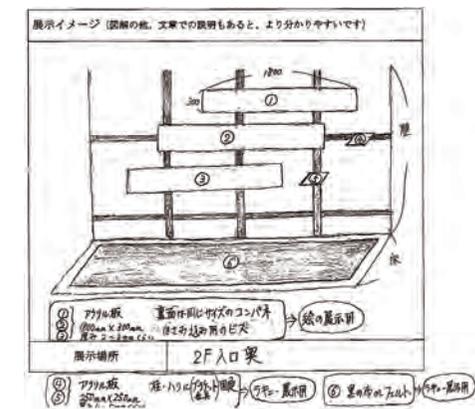


「タイトルなし」

制作年不詳 松宮真知子

実行委員：百々隆久(Bone! Labo(ボネラボ))

パズルブロック「LaQ (ラキュー)」を使った作品と、鉛筆やパソコンを使って描いた絵画、どちらの作品にも作者の世界観が表現されています。作者の世界観を一体で見てほしいという思いから、壁一面を使った展示を考えました。ブロックの作品はあえて床に配置し、作品と空間を一体化して見せることを目指しました。その結果、ブロックで作られた動物や馬車などが、和室に入り込んできたような演出になりました。またその背景となる位置に平面作品を展示し、別々に作られた作品ながら一体感のある展示となりました。

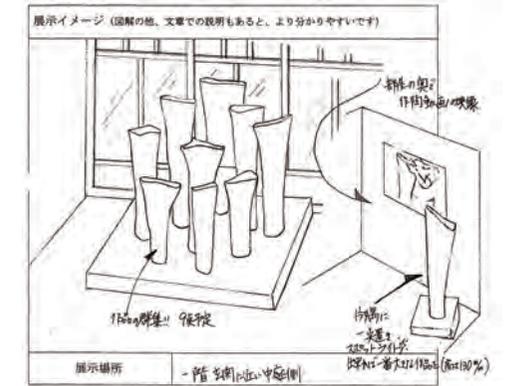


「コップ」

2010年頃～ 篠原尚央

実行委員：松本奈美(社会就労センターあおぞら)

薄い筒状の陶芸作品は、高さ3～40cmから大きいものは1mほどにもなります。不安定ながらも絶妙なバランスで立つ作品の不思議な存在感を表現したいと、NO-MA1階の窓際を使った展示方法を考えました。展示台は低くて大きなものにし、色は素焼きや藁焼きの色が映える濃い目の色を選びました。不規則に作品を並べ、まるで作品が生えてきているような印象を与えます。併せて、動画も展示し、制作の過程も知ることができる展示となりました。



“エレガントな展示”を目指して

ing展の実行委員は、作者と日常を共にする支援員やスタッフです。作者のことを知ってほしい、こういう部分を見てほしいという支援者やスタッフの視点で、ing展は作られます。その視点はing展の魅力の一つですが、それゆえ、作者についての情報をたくさん盛り込んだ展示プランを考えてしまうことも少なくありません。

今年もing展にはアドバイザーとして美術家の野原健司さんが参加してくださいました。野原さんは委員の皆さんへ「エレガントな展示を心がけましょう」と声をかけられました。そこには、作品そのものの魅力を引き出す展示を、という意味が込められていたと思います。協議を重ねるなかで、野原さんの言葉に「この展示プランだと、作品が目立たなくなるかも」と、作品が映える展示や鑑賞者の視線で見られることを意識した展示を検討することが出来ました。限られた時間の中で、何を見てほしいか、何を伝えたいかを考え、それを伝える展示プランを考えることは簡単なことではありませんが、委員同士で意見を出し合いながら検討を重ねました。そして、決定したプランの通りに、実行委員の手で作品が展示されました。委員からは、「作品をどのように展示すれば良く見えるか、様々な捉え方をしてもらえると等新しい気づきがあり、良い経験になりました」との声も聞かれました。



3 あ～！いっさ！！

目的

アイサでは昨年度から「あ～！いっさ！！」を実施しています。オンライン会議用ツールZoomを活用し、発表者・参観者とも事前申し込みで参加する、限られた人数での小さな発表と交流の場です。今まで家庭や地域で表現活動に親しんできた人が創作した作品やパフォーマンスをその場で見せたり、事前に撮影した映像を使ったりしながら、自分の活動を紹介します。その挑戦が発表者自身の自信になったり、新たな創作への意欲を生むことにつながるという効果を期待しています。観覧者にとっても、それぞれの発表者から直接伝わる表現活動の味わい深い世界を知り、創作の世界をともに楽しみ、互いに分かり合う機会になることを目的としています。

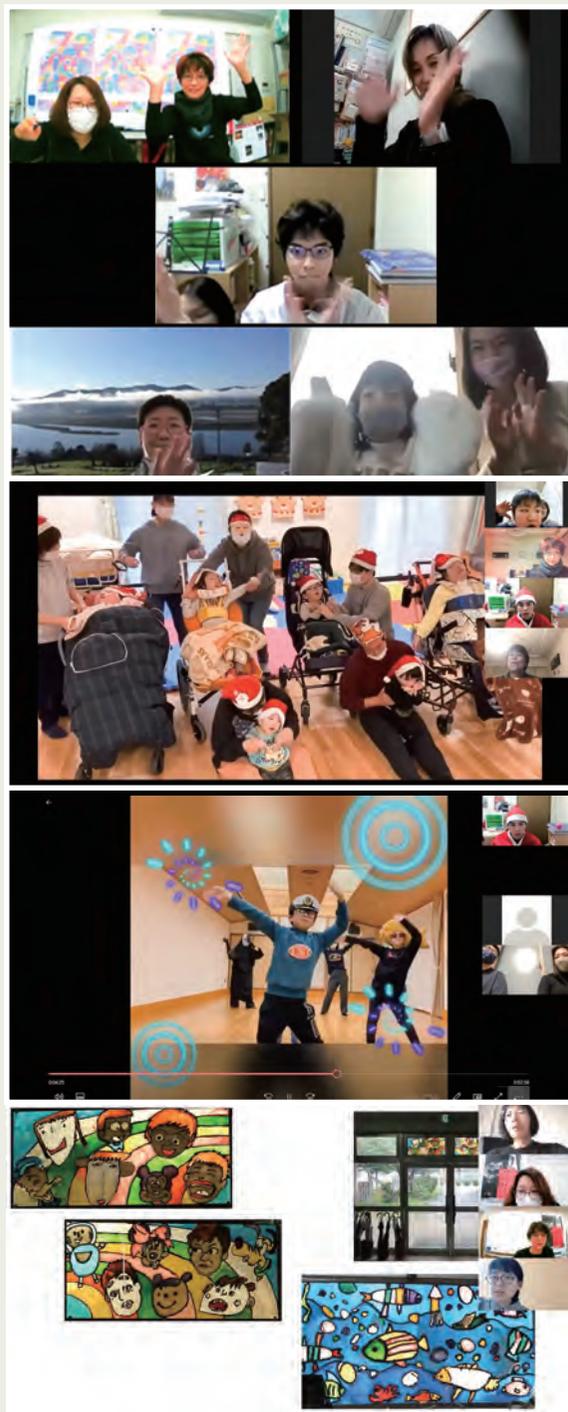
開催概要

日時：第1回 2021年6月27日(日)10:30～11:30
第2回 2021年8月21日(土)10:30～11:30
第3回 2021年10月23日(土)10:30～11:30
第4回 2021年12月26日(日)19:00～20:00

発表者：個人6名 団体4組

参観者：12名

(いずれも延べ人数)



小さな発表の場

「あ～！いっさ！！」を開催するまで

(1) 広報

チラシやホームページ、SNS、パフォーマンス・ネットワーク・ミーティング(p17参照)等の機会を利用。昨年度の参加者(発表者・参観者)には直接参加の呼びかけを行った。

(2) 参加相談会

Zoomの操作に慣れていない人を対象に、参加方法について相談の機会を設定。(利用はなかった)

(3) 申込受付

発表者、参観者とも電話・メールで参加受付。昨年度から続けての参加申込みや、「〇〇さんから聞きました」と参加者のつながりからの申込みが大半を締めた。

(4) 事前連絡(開催日の数日前)

申込者に、発表内容や参加ルール等の確認を行い、オンライン発表会のURL情報を送付。

(5) 発表当日

毎回4～5組が発表。発表者は、持ち時間(10分)で自分の作品や活動を発表。参観者から質問や感想をもらい、発表者との対話を終えたら次の発表者へ。

振り返り

「●●さん」という顔の見える関係を大事にしたいという願いを持ち、今年も「小さな発表の場」として「あ～！いっさ！！」を継続しました。6・8・10・12月の4回の開催を企画したところ、10月、12月あたりから先に出演者が決まっていく状況でした。これには、「発表日を目指して準備していきたい」という出演者の思いが見て取れます。発表当日、確かにこの日に向けて準備をし、緊張した面もちで臨んでおられる姿がとても愛おしく印象的でした。発表後の参加者とのやりとりを終えた時のホッとした表情からは、この10分間が挑戦する機会を作り、挑戦したからこそ得られる達成感を引き出していると感じます。

参観者の皆さんからは作品そのものに対する質問や感想とともに、今日に至る過程に関する質問が多くありました。「どのくらい練習したのですか」「どうして好きになったのですか」など、人まるところを受け止めたやりとりが進み、その対話の中では温かい感情が行き交っていました。作品や活動を話題の切り口としながら、どちらか一方が受け取るという関係ではなく、お互いに温かい気持ちを伝え合う時間になったのだと思います。小さくても、いや、小さいからこそ、人と人がつながるための窓のような役割を果たしたとしたら、こんなに嬉しいことはありません。

4 調査



目的

障害のある人が、表現活動に親しみながら地域で豊かに暮らす環境を整えるため、アイサでは舞台芸術分野の現場訪問調査を令和2年度から実施してきました。音楽やダンス等、地域で活動されている団体を訪ね、日頃の活動の中で感じておられることやお困りのことを直接お聞きすることで、それぞれの団体の活動の振興のために必要と思われる内容を検討し、必要な支援につないでいきます。それとともに、各団体から挙げられた内容が他団体にも共通の課題である場合はアイサの事業計画に反映し、県の支援センターとしての効果的な支援につなげることを目指してきました。

表現活動に携わる人に直接お会いして言葉を交わすことで、障害者の芸術文化活動に関するネットワークを広げ、人と人、コトとコトをつなぐアイサの役割を果たすことを目的としています。

開催概要

●舞台芸術活動調査

調査対象：障害のある人の舞台芸術活動を行っている滋賀県内の団体および個人等

調査内容：活動の実態／活動上の課題／新型コロナウイルス感染症の影響等

調査数：9団体

訪問先：団体名称(活動内容、活動地域、調査日)

Dドラファミリー(楽器演奏、多賀町、2021年5月15日)

ひよっこだんすくらぶ(ダンス、近江八幡市、2021年5月21日)

わ音(歌&ギター、東近江市、2021年5月30日)

劇団ふりいだむ(演劇、甲賀市、2021年5月30日)

滋賀県立新旭養護学校(教育活動の中での取り組み、高島市、2021年5月31日)

スマイルくさつ(障害福祉事業所の日中活動、草津市、2021年6月3日)

和太鼓TAO(和太鼓、栗東市、2021年6月10日)

まちプロ一座(演劇、大津市、2021年6月24日)

なんくるないさーず(手話バンド、守山市、2021年6月18日)

●パフォーマンス・ネットワークミーティング

開催日：2021年6月28日(月)

会場：草津市立市民総合交流センター(キラリエ草津)

内容：舞台芸術活動調査および参加団体の活動等の共有

参加：7団体

*「令和3年度滋賀県障害者表現活動の地域拠点づくりモデル事業」として実施。

振り返り

2020年度に引き続き舞台芸術分野での調査として、昨年度に訪問できなかった活動団体と、県が毎年実施している造形活動に関する調査で「舞台芸術活動に取り組んでいる」と回答があった福祉事業所をリストアップしました。

訪問してみると、実際には活動を縮小されていたり、活動を始めるにあたっての悩みを抱えていたりするところもあり、その場合はアイサの相談につながりました。

訪問した舞台芸術の活動団体は、それぞれが特徴のある活動を展開されています。今までの訪問調査では知的障害のある方を含んだ活動が多かったのですが、今年度は視覚障害や盲ろう等の障害のある方による活動の調査が実施できました。

調査では、新たな活動団体の情報を得ることもありました。電話やメール等で活動に関する情報を聞き取り、「パフォーマンス・ネットワークミーティング(*)」への参加をお誘いした結果2団体が参加され、他の団体との交流につながりました。

*パフォーマンス・ネットワークミーティング…県内で活動する表現活動団体の情報交換・共有の場として2019年度から開催。年2回程のミーティングを行い、そこで出た案が発表の場「おっともだちひろっば」(2020年度はオンライン、2021年度は県内2会場で実施)の開催につながりました。

今年度は今までつながりが弱かった湖西エリアでの活動についても調査したいと考えました。そこで、コミュニティセンター等のまちづくりの中間支援機関や特別支援学校を訪問し、湖西エリアの舞台芸術活動団体の情報を得ることができました。次年度以降はそれらの団体と直接つながり、新たな展開を模索したいと思います。

2020～2021年度にかけ、表現活動に取り組んでいる団体を中心に訪問調査を実施してきましたが、今後は「取り組みたいと考えている」「課題があって取り組めていない」といった事業所についても訪問対象とし、ニーズに応じて相談対応していく必要があります。県内の様々な活動や場に目を向け、継続して訪問・調査していくことで、活動主体との関係性も構築できます。このことは県内の現状を数値でなく肌で理解し、県の支援センターとして、目指す方向性を明確に描いて事業展開していくことの基盤になるものと考えます。

訪問調査先で得た情報に潜むニーズや可能性に気づき、共有し、協働しながら次の展開につなげていく一息の長い地道なアプローチや取り組みが重要であることを、出会った人たちが教えてくれます。

5 情報発信



Information

ホームページでの情報発信 (2021年4月1日～2022年2月28日)

●ホームページ掲載記事数・アクセス数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
記事数	10	14	16	22	12	13	15	11	5	10	9	137
アクセス数	1,272	1,689	1,971	2,414	1,909	1,749	2,261	1,777	1,515	1,500	1,272	19,315

*2020年4月1日～2021年3月31日実績 掲載記事数：136、アクセス数：13,297

●掲載記事(カテゴリ別)

アイサからのお知らせ	10
イベント・展覧会情報	60
公募情報	44
研修・調査等レポート	23
計	137



アイサウェブサイト

アイサに届くイベントや公募情報、事業でつながった団体からのお知らせなどをホームページで発信しています。また、アイサ大学や訪問調査等のレポートも掲載し、定期的に発信することで、アクセス数が増加しています(*)。アイサのホームページを活用していただくために、定期的な情報発信を継続していきます。

また今年度、公民館で配架されているチラシを見て研修に参加された方がいました。アイサのリーフレットや研修チラシを、公民館や社協など地域活動の拠点に送付し事業周知を依頼したのは昨年度からで、紙媒体による情報が届きやすい層が一定数あることがわかります。ホームページと両方での事業周知が必要だと感じています。

そのほかアイサでは、舞台芸術分野の訪問調査に併せ、県内の文化施設訪問も実施しました。目的は、それぞれの地域の障害のある方の活動情報を得ることやニーズを知ること、また訪問を通じてアイサを知ってもらうことです。2020～2021年度にかけて、県内26か所の文化施設を訪問しました。

訪問時には、アイサの事業についてお伝えするとともに、その文化施設における障害のある方の活用状況なども尋ねました。障害のある方との取り組みや利用はないという施設が多い現状はあるものの、貸館としてワークショップやコンサート、作品展などで障害のある方が活用されているところもありました。障害のある方へ向けた取り組みの必要性を感じているという施設の担当者が、情報を得たいとアイサの研修会に参加してくれることもありました。



Consulting

6 相談

相談支援 (2021年4月1日～2022年2月28日)

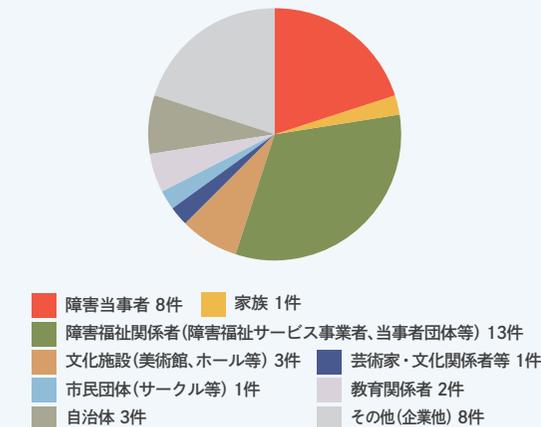
●2021年度相談支援活動実績

相談件数40件
相談回数90回



相談パンフレット

相談者別(件数)



相談内容別(件数)



今年度は、2月28日時点で40件の相談活動を行いました。内訳でみると、障害福祉関係者や障害当事者からの相談が多く寄せられています。

相談内容としては、発表の機会について情報提供を求めるもののほか、展覧会等の開催に必要な情報やノウハウに関する相談があり、これはここ数年の傾向であるため、アイサ大学美術コースの研修は、その状況をふまえて内容を検討しました。権利保護に関する相談は、障害福祉関係者からの作品の取扱い全般に関するもののほか、企業等から作品を二次利用したいという問い合わせもありました。

また今年度は、相談支援活動に必要な情報(公募展等の発表の機会、活動の場、貸館・貸ギャラリーなどの地域資源等)を活用しやすく整理しました。以前からスタッフ間で共有できるようにはしていましたが、相談対応ごとに集めた新たな情報が未整理のままでした。古い情報を更新し、また、相談者のニーズに合わせた情報を取り出しやすくするために、記録の整理方法を見直しました。併せて、弁護士の助言を受けて対応した相談事例も参照しやすいように相談記録ソフトでの管理に移行しているところです。

7 協力委員会



Network

アイサでは協力委員会を設置し、滋賀県障害者芸術文化活動支援センターの実施事業について助言をいただいています。今年度は教育、文化、福祉等の分野から7名が委員を務めてくださいました。委員会では、事業計画や評価指標に対する意見交換と、実施した事業の評価を行っています。また、意見交換や事業評価に加え、芸術文化活動を支える各分野の関係者とのネットワークづくりも委員会設置の目的の一つとしています。

委員会では、事業内容にとどまらず、今後のアイサの役割に期待すること、方向性に関するご意見も多くいただきました。ここで、その一部を紹介します。協力委員会は、年度ごとの事業の進め方だけでなく、長期的な視点でアイサのあり方を更新していくために欠かせない場となっています。

2021年度協力委員

岩原勇氣(特定非営利活動法人BRAH=art.)

遠藤恵子(特定非営利活動法人まちづくりスポット大津)

大塚ひろみ(彦愛犬地域障害者生活支援センター ステップアップ21)

白崎清史(公益財団法人びわ湖芸術文化財団 滋賀県立文化産業交流会館)

細谷亜紀子(滋賀大学教育学部付属特別支援学校)

美濃部裕通(NPO法人CILだんない)

宮本ルリ子(世界にひとつの宝物づくり実行委員会)

実施概要

第1回 2021年6月10日(木) 会場:草津市立市民交流プラザ 小会議室2

第2回 2022年3月4日(金) オンライン開催



第2回協力委員会

第1回抄録

相談事業について

委員 相談内容は質問と回答をデータで残し、共有することが重要。データベースがあれば、傾向なども見えやすくなる。県内の中間支援では、県や市町で記録する項目を統一したことで、俯瞰して状況を見返すことができるようになっている。

アイサ 相談内容や回答については記録しデータベースとして共有している。相談分野ごとの分類、チェック項目の設定などをして、月あるいは年単位で確認できる。ただし、分析までは至っていないので今後取り組みたい。全国の障害者芸術文化活動支援センターでは、記録する項目の共通化を進めつつある。

社会参加できるとは？

委員 事業全体の目標として「芸術文化活動を通して、より多くの障害者が社会参加できるようになる」と掲げているが、「社会参加できる」とは具体的にどのような状況を目指しているのか。また、芸術文化に興味がある人はそもそも限定的(例えば料金を支払って観劇をする人など)だと感じるので、障害のない人も誰でも参加できるような活動もあるといいのではないか。

アイサ 芸術活動に携わる人が限定的だというのは、たしかにそう感じる。「障害者が」と記載しているが、芸術文化活動を通して、障害のある人もない人も、みんながつながれることを目標にしたいと考えている。「あ〜！いいっさ！！」や研修には一般の人も参加できる。芸術文化活動には人と人をつなぐ力があると感じているので、そこを切り口に身近なまちや社会が変わっていくことを目指したい。現在取り組んでいる事業はそのとっかかりとなるものと考えている。

委員 専門家や芸術的な助言、意見は大切だが、当事者がどう思っているのかが伝わる機会が必要。感動ポルノのようなイメージではなく、障害を感じない地域や社会をつくる気概を大切に取組んでほしい。

アイサ ここ数年、当事者参画に注力している。表現をする人だけでなく、観る人、制作スタッフにも障害のある人がいたらいいと考えているが、まだまだ取り入れられていない状況。障害のあるなしに関わらず、地域に暮らしている人すべてが対象になるような取り組みを続けていきたい。

インクルーシブ教育との連携

委員 障害のある人だけに限らず広げていくために、インクルーシブ教育に関わる活動を考えてみるというのではないかと。例えば、滋賀県が実施した陶芸の森で支援学校と小学校の子どもたちが一緒に学ぶプログラムは、アートが間に入ることでとてもいい時間になったと聞いている。

アイサ 2020年度に、障害のある人自身がアイサの相談窓口アクセスしやすくなればという思いで、リーフレットを制作した。教育現場との関わりとしては、これを小学校などで配布したり、教育委員会の広報に掲載いただいたりした。インクルーシブ教育を前提として教育分野との連携については今後取り入れていきたい。

研修内容について

委員 技術や知識も必要だが、支援者が日々どのような着眼点を持っておけばいいのかといったことも研修内容に含まれるといいのではないか。また、スタッフの異動や退職が活動に影響することが多い。アイサが専門家を派遣するなど、活動を継続するための中間支援をどのように進めようとしているのか。

アイサ 今年度の研修では、事業所等ですでに展開されている活動をさらに広げる、新しいことを始めるといった場合に役立つような内容にできればと計画している。

アンケート調査で、専門家の関わりがある団体のほうがより活発に活動していることがわかった。また研修に参加する余力がない団体もある。専門家の派遣や、アウトリーチのようなことも取組んでいきたい。

第2回抄録

オンラインの取り組みについて

委員 「あ～！いいっさ！！」は、小さい規模だからこそ参観している人も作品を作っている人と同じ場所に立たせてもらっているような気分を味わうことが出来た。また、参加者が7～8組程度の少人数だからこそ、発表者は普段出さない表情をみせられる部分もあるのではないかと思った。コロナが収まったとしても、こういう機会があることで発表しやすい人もいるのではと思う。

委員 いろいろなオンラインの取り組みに参加してきたが、バーチャル空間でアバター(自分の分身となるキャラクター)を介してのみ自分を表現できる人も増えている。人前に出ること、自分として語ることに苦手な人も、そういった場があれば思いを語ってもらえるのではないかと思う。

アイサ オンラインでの場作りは、来年度の事業で取り入れられるか検討したい。バーチャルで実施し、その後リアルで実施する、など様々な方法で実施するのもいいかもしれない。

訪問調査の結果について

委員 訪問調査の内容は公表しているか。また、調査結果を次年度の計画に反映するための評価や計画立案の協議に、しっかりと外部の人が関わるとよいのではないか。

アイサ 調査内容はホームページで公開している。今後も、調査で得たニーズなどをもとに事業計画を立て、協力委員の皆さんに共有し、いただいた評価、ご意見を取り入れながら実施していく。

研修について

委員 講師として参加したが、勉強させていただいた。障害特性はいろいろあると思うが、それぞれの人の声をしっかり聴くということが合理的配慮なんだなということを改めて感じた。

ネットワークについて

委員 同じ地域で活動する協力委員同士、互いの取り組みに参加したり、協力をいただいたりすることができた。その結果、アート作品で公園を飾る企画では、凝った作品が完成した。散歩中の人々が作品を写真に撮るようすを見て、「障害者」や「地域」にとられない結びつきが広がる可能性を感じた。

委員 ワークショップと展示を実施する際に、アイサに特別支援学校等を紹介いただいた。その展示会場がアイサの展示研修の会場と同じで、相乗効果により来場者の獲得につながった。協力委員会もいっつながりの場になっていると思う。

次年度に向けて

委員 今後は、芸術の取り組みが地域づくりや社会資源への働きかけなどへつながっていくとよい。例えば発表の場にあるバリアに対して必要な配慮は何かということや、障害者と地域住民をつなぐ取り組みなど、障害福祉の面だけでなく地域やまちの社会資源なども含めた広い枠組みの目標設定もあるべきではないか。

委員 障害のあるなしに関わらず、文化芸術との距離感を縮めていけるような取り組みを要素として入れていけるといいなと思った。

アイサ アイサは障害福祉課の事業だが、文化芸術側とも連携していきたいと考えている。また、アイサは地域住民との関わりが見えにくいのが、NO-M Aは地域住民を交えた取り組みも実施している。アイサでもそれが見える形での活動の組み立てが必要だと感じた。

1年を終えて

相談、研修、展覧会やオンライン発表会、調査と、今年も事業を実施するなかで様々な方との出会いがありました。相談内容から研修会の内容を検討したり、調査で訪れた団体の方に新たな団体を紹介いただいたり。一つの出会いが、次の取り組みや新たな出会いにつながりました。研修の参加者同士で連絡先を交換する場面もあり、アイサをきっかけに出会った方同士もつながり、新しい何かが生まれる、そんな役割を果たせたらうれしいことです。

鑑賞サポートの研修に参加された協力委員から「障害特性は人によりいろいろあるが、それぞれの人の声をしっかりきくことが合理的配慮なんだと感じた」との言葉がありました。研修でも、「車いすの人」ではなく、その人自身とコミュニケーションを重ねながら、どんなことが必要か、何が出来るかを考えていくことが大切だということを共有しました。これは、事業を実施していくうえでも大切な視点です。企画の段階から、障害のあるなしに関わらずいろんな視点で事業を検討し、つくっていくことが必要だと感じています。

研修のグループワークでも、「そもそも対話がなされなければミスマッチも起きない」という話がなされました。立場の違う人が対話を重ねることで共生につながる。時には意見がぶつかることもあるかもしれませんが、その対話が次への一歩につながります。

顔が見える関係だからこそ次はどんなことをしようかという気持ちで、みんなに生まれ、次の取り組みにつながる。そこにまた新しい誰かが加わって、輪が広がっていく。そんな風に一つ一つの出会いをつないで、事業を展開していくことが大切だと改めて感じています。

たくさんの方と出会い、対話を重ねながら、人と人がつながっていくきっかけをつくるのが、アイサの役割だということを強く感じた一年でした。一つ一つは小さなことかもしれませんが、それを積み重ねることが、障害のあるなしに関わらず芸術文化をきっかけに人と人がつながるまちづくりにつながっていくと考えます。次年度も、目の前の出会いやつながりを大切にしながら、大きな目標を見失うことなく、細かで地道な取り組みを重ねていきたいと思っています。

最後になりましたが、本事業の実施にあたりご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

アイサはその取り組みの中で、たくさんの人びとと出会ってきました。感染症蔓延によって活動が制限された2021年度も、相談支援や研修会、展覧会などを通して、障害のある人とともに芸術文化活動に取り組む人びととの新たな出会いがありました。出会った方々が、さらに輪を広げているような活動や人となりが、嬉しい出来事もありました。その中から、4組のみなさんにお話を聞きました。(2022年1月取材)



舞台に立つ一人の人間として いろいろな人と出逢いたい

劇団 まちプロ一座



劇団 まちプロ一座

2003年に旗揚げした劇団。メンバーは障害のある人びと、社会福祉法人共生シンフォニーの職員たち。障害当事者の心の内を伝える演目をゼロから全員で作上げ、公演を行う。俳優も制作スタッフも障害のある、なしは関係なく、演劇を通していろいろな人と出逢うために活動を続けている。

今年度の施設・学校合同企画展の参加団体を募る際、アンケートを実施しました。「新型コロナウイルスの影響を受けて、文化芸術活動にどのような影響がありましたか？」の間に、「発表の機会がほぼ全てキャンセルになった！公演機会獲得のためのアイデアありますか！」という切実な訴えを記入して来られたのが、大津で演劇に取り組まれている劇団「まちプロ一座」でした。これはそのままにはできない！と、電話で状況を確認。ちょうど同じ頃、相談を受けていた企画とつなぐことができないかと考え、事業担当者とともに「まちプロ一座」を訪問しました。

その出会いがきっかけの一つとなって、まちプロ一座は「文化芸術・共生社会フェスティバル」(主催：公益財団法人びわ湖芸術文化財団、「文化芸術・共生社会プロジェクト」)に出演が決定。本番が迫った1月中旬、再び稽古場を訪ねました。まずは、最新作『紫の夜が明けるとき』の通し稽古を特等席で拝見。その後、出演俳優のみなさんに演劇をすること、本番に向けた意気込みなどについてお聞きしました。

井上みどりさん

演劇のことで頭がいっぱいで、主人から用事を言われても全部忘れるくらい。練習を録音して家で聞き直したりとか。『紫の夜…』はわたしの

作品だから再演の時には私がやらせてもらうけど、これで主役はかんにん。みんな主役をやるのを待っているから。

障害者になってしまったから、健常者にわかってもらうのが難しい部分があって、つい感情的に言うてしまうことがある。でも、ぐっとふみとどまったり、言い方を変えたり。ここのみんなもいろいろな思いがあって、その中で共感してくれる部分もあるから、私もそれを学んでいる。

*初めての主役を演じるみどりさん。高次脳機能障害があります。『紫の夜が明けるとき』はみどりさんの体験を元に作られました。

橋本あーささん

演劇はいろいろ対応できないこともあるので、頭がパニックになりながらやっています。やめようかなと思ったこともあるけど、やめてしまうとなくなってしまうので(続けている)。みどりさんたちと「こっちは全力でやるから遠慮しなくていいよ」と言い合ってやっている。みどりさんには助けってもらったりもしている。

朴理英さん

出演は4回目です。緊張しますが、楽しさのほうが多い。(公演に向けて仕上がり具合は?)90点くらいです。

福坂厚子さん

主役のみどりさんの友達役を演じています。私は演技が大好きで。障害者というよりも一人の人間として、こんな感じでいたいとか、台詞を家で読み返したり、いろいろやってみています。私は脳性麻痺でパッと話せなくて、一言話すのに時間がかかって、後が続かないのが、ちょっと悩みなんやけど。でも演劇は楽しいです。本番の

前日は寝られなかったりするけど、舞台に出て、みんなが喜んでくれるはったら演劇やってよかったなと思って。

俣好雄さん

車が好きなので、役名は俣好雄です。去年は主役だったので、今年は緊張しなくなりました。去年はいい経験だった。

*俣さんは高次脳機能障害があります。主役の経験と、状態は異なるけれど同じ障害があるみどりさんをはじめ、劇団員のみなさんを支える存在だそうです。

くぼてらりょうたさん

俣さんともそうですが、メンバーのみなさんとは冗談を言い合える関係なので、演劇がすごくやりやすい。作り込むというよりも、アドリブをなにげなくやったり。そのほうがみなさんに面白く見てもらえると思います。

座長 小石哲也さん

座長には立候補しました。最初の頃は、自分が全部なんとかせなあかんと思いでしんどくなってしまった。でも最近、本当の意味で自覚が足りなかったことに気づいて変わってきた。大変だけどけっこう楽しくやっています。コロナの前は本番がたくさん出来ていたのに、この2年は集まってできない。ほんまに減っちゃって。収束したら、いつでも公演できるように、みんなががんばって練習しています。まちかどプロジェクトで保育園交流というのがあって、卒園記念公演をリモートでやったんです。つながっているけど、声が遅れて届くとか、テンションが違うとか。交流したくてもうまくいかない。だからやっぱり、直に見てもらいたい。早く収まってほしいです。

身近な場所で作品にふれる機会をつくる アートを通した共生を目指して

NPOぼぼハウス 上田久美子さん、鈴木裕子さん

認定特定非営利活動法人NPOぼぼハウス

1999年、翌年の介護保険制度開始を見据え、高齢者支援を行う任意団体として活動を開始。彦根市を拠点に高齢者、障害児・者、子育て支援を行っている。「誰もが生きていてよかったといえる街づくり」を理念に掲げ、地域福祉に取り組む。2021年、活動が評価され「第7回糸賀一雄記念未来賞」を受賞。



2021年10月、彦根市役所の市民ホールで「街かどアート展」が開催されました。主催者は「街かどアート展」実行委員会。彦根市をはじめ湖東エリアの福祉に携わる法人や当事者団体からなる実行委員会です。事務局として展覧会の企画・運営を担うのは、今回お話を聞いたNPOぼぼハウス地域協働室のみなさん。初めての取り組みなので運営のことなどを相談したいと、アイサを訪れてくれました。その出会いから、地域協働室の上田久美子さんと、鈴木裕子さんはアイサ大学美術コースの研修に参加。その後も、展示方法など困りごとの相談にアイサを活用くださっています。

協働で取り組む

NPOぼぼハウス(以下、ぼぼハウス)の鈴木さんがアイサに来てくれたのは2021年の春。すでに複数の事業所に実行委員会への参加を呼び

かけており、展覧会の開催は決まっていたものの、予算はゼロという状況だったそうです。主に補助金申請についての相談をするためでした。残念ながら申請は通らず、補助金は得られませんでした。しかし、「寄付をいただいたり、いろんな事業所さんと協力し合って開催できてよかった」と上田さんは言います。

実行委員も少しずつ声をかけ、参加団体は半年ほどで10を超えました。参加を呼びかける際に上田さんたちは、「一番の目的は、障害者のアートを見てもらうこと。見ることでまずは心を動かす作品を作る人がいることを知ってもらい、共生につなげていけたらと考えている。作品の順位をつけるとか、どの作品がいいとかを評価するためではない。作品を売るためでもない」ことを伝えてきました。

上田さんは、「作品を出展する団体だけでなく、什器の搬入搬出や展示作業を手伝うためだ

けに参加してくれる事業所もある。わたしたちは素人だけど、アートに詳しい団体もあり、それぞれが得手不得手を助け合っている」とその協働について語ってくれました。

展示研修で学んだこと

展示作業も初めてのことばかりで、ある時は立派な作品なのに額縁がなくて困っていると、アイサに駆け込んでくれました。「“アート”というとか専門的な道具でなければいけないと思いついて。最初の頃は両面テープで頑丈に固定しすぎて、外すのが大変だったり」と苦労していたそう。そこで、上田さんと鈴木さんはアイサ大学の作品展示研修に参加しました。

上田さんは「キャプションや作品を固定するのに粘着ゴムでいいのかと驚いた。とにかく“ちゃんと”展示することに囚われすぎた気がついた。参加者のみなさんと話し合いながら展示をつくっていく体験も勉強になった。意見が一致するかどうかは関係なく、考える過程がアートを通してのつながりだと感じた」と研修を振り返りました。

「街かどアート展」は市役所や銀行など、広さも雰囲気も異なるさまざまな場所で開催しています。その場所に合わせた作品選定やレイアウトは事務局で決めるため、アイサの研修で学んだことがすぐに活用できていると言います。上田さんも鈴木さんも「学ぶ機会をつくってもらえたらまた参加したい。新しいことをどんどん学びたい」と、アイサの研修に期待を寄せてくれました。

アンケートの声が後押しに

展覧会を開催すると、別の場所でも開催してほしい、この作品も展示したいなど声をかけられるようになりました。「すべてに応えられるわ



けではないが、可能な限りいろんな場所で開催したい。小規模でも目に触れてもらう機会を増やすことを大切にしたい」と上田さんは考えています。

ただ、人も予算も限られた中でどのくらい続けていけるのかは未知数の状況です。少しずつ賛同者を増やしていくために、アンケートの声を共有しています。展覧会を見て、わざわざペンをとって書いてくれた言葉は、関係者のみなさんや、ぼぼハウスの職員にも響いていて、「わたしも見に行こうという人が増えてきた」と上田さんは感じています。また、「これまで作品をつくっていても発表の場がなく眠っていたものが、誰かの目にふれて、見た人の心を動かしたからアンケートを書いてくれた。その声が作者や家族、周囲の人たちに届くことは大切」と考えています。

今後については、「共生にはまだまだつながっていない。今は突っ走りながらやってきたが、これからも継続してやっていきたい」と話す上田さん。展覧会という形式にこだわらず、「喫茶店や暗い雰囲気になりがちな病院の待合室など、なにげなく作品に触れてもらえる場所」に作品を展示してみたいと考えています。また「言葉で伝えられない分、作品を通して表現をしている人もいる。作っている人、描いている人、見た人、いろんな人の心を動かして、みんなの気持ち明るくなる取り組みにしていきたい」と語ってくれました。

描くこと、演奏することを楽しみながら いろんな人とながれる場を探していた

MIKAさん、ご両親



「あ～！いいっさ！！」でピアノ演奏を披露してくれたMIKAさん

2年連続で「あ～！いいっさ！！」に出演してくれたMIKAさん。2年前、ご両親と一緒にアイサを訪れ、MIKAさんが絵を描いたり、ピアノを弾いたりしながら交流できる場所を探しているというご相談を受けました。「あ～！いいっさ！！」の参加者募集をしていたので、出演してみませんかとお誘いすると、その場で参加を決めてくれたMIKAさん。オンライン発表会の感想や、そこで生まれた交流などについて、ご両親も交えてお話を聞きました。

新たな出会いと続く交流

アイサと出会うずっと以前に、お母さんはNO-MAを訪れました。障害のある人の作品を扱う美術館が身近にあると知り、「NO-MAのような場所なら娘が楽しく交流できる機会があるかもしれない」と感じて、NO-MAのことをずっと心に留めていました。2020年の冬、

あるイベントでお母さんはアイサのスタッフと出会います。それがきっかけとなり、アイサとMIKAさんとの交流が始まりました。

一方、アイサでは感染症の蔓延防止のために人が集まれないなか、オンラインで発表の場をつくろうと「あ～！いいっさ！！」を企画。初めての試みであり、オンラインでつながることができるのか、不安を感じながら参加者を募っていました。そんな時、相談に訪れたMIKAさんが一番に参加を決めてくれたことは、アイサにとって大きな励みになりました。2020年の「あ～！いいっさ！！」出演に続き、2021年10月にも再び参加。『星に願いを』のジャズアレンジをピアノ演奏で披露し、自身が描いた絵も紹介してくれました。「いろんな人が登場して、感想を話してくれて、娘も私も楽しみました」とお母さんは参加した時の様子を振り返ります。また、出演が

きっかけとなり、滋賀県内で音楽活動をするグループと新たな交流が生まれました。12月、MIKAさんはそのグループが出演するクリスマスコンサートに行き、とても楽しい時間を過ごしました。いまでも、メールのやりとりをするなど交流は続いています。

いろんな人たちに囲まれて楽しく過ごす

MIKAさんの日課は、絵を描くこと、朝昼晩の決まった時間に30分ほどピアノを弾くことです。最近よく弾いているのが、大好きな松任谷由実さんの『春よ、来い』。この曲はお母さんにとっても思い出の曲です。

ある時、MIKAさんが体調を崩し入院することになりました。入院中に、病院にあったピアノでMIKAさんが『春よ、来い』を弾き、お母さんが一緒に歌ったところ、たくさんの人が集まって聞いてくれました。演奏と歌がとても喜んでもらえ、嬉しい時間を過ごせた二人にとって『春よ、来い』は思い出の曲になりました。お母さんは「いつオファーがきてもいいように、娘は毎日練習しています」と笑います。

他にも、MIKAさんには毎日いろんな予定があります。猫好き友達のおばちゃんのところへ行ったり、認知症のおじちゃんのところへ行って声をかけたり、甥っ子と遊んだり。たくさんの友達や、周囲の人たちとの交流を楽しんでいます。お母さんは「猫好きのおばちゃんは私の友達でもあり、娘の友達でもあって、ずっと見守ってくれている。地域に暮らす外国出身の人たちとも交流がある。いろんな人たちに囲まれて楽しく過ごすのがいいのかもかもしれません」と話します。

これからは、たくさんのつながりの中で暮らしているMIKAさんが、「自分のやりたいこ



美しい色使いで不思議な魅力のあるMIKAさんの絵

とを、さらに楽しめる機会をつくっていただけら」とお母さんは考えています。

出会えた喜びを伝え合う

インタビューの中で、お母さんはアイサと出会えた喜びとともに、「あ～！いいっさ！！」のような場を続けてほしいと何度も応援の言葉を伝えてくれました。お父さんは、MIKAさんとの海外旅行の最中に二人で描いた素敵な絵日記を見せながら、旅の思い出を語ってくれました。MIKAさんがアイサスタッフとの再会をとても楽しみにしており、インタビュー前に美容院へ行ってはりきって臨んでくれたと聞き、ますます励まされました。

「次に開催する時には、また出演してくれますか？」とMIKAさんに聞くと、「いいですよ～」と快諾してくれました。「娘が発表会に出ると聞いたら、見たいという人がたくさんいる。日本に長く暮らしている外国出身の人や、いつもサポートしてくれるおじちゃんやおばちゃんたち。次の機会にはみんなに見てもらいたい」とお母さんは言います。

最後は、MIKAさんのピアノと、お母さんの歌による『春よ、来い』を聞かせてもらい、再会を約束しました。

誰もが気軽に参加できるコンサートづくり 鑑賞の喜びを多くの人に届けたい

加藤哲さん(エンモ・コンサーツ)

プロフィール

京都出身、長浜市在住。大学で音楽を学び、卒業後は楽器店に勤務。その後、アパレルメーカーで長年働いてきたが、2019年、音楽に関わる仕事をするために早期退職。長浜市立木之本スティックホールの職員として勤務する傍ら、2021年4月に音楽コンサートの企画・制作サポートを行う非営利団体「エンモ・コンサーツ」を立ち上げた。長浜市を拠点に地元出身の演奏家の紹介や、ホールの特性を生かしたコンサートづくりに取り組んでいる。



加藤哲さんとの出会いは、2021年6月。アイサが障害のある方の芸術文化活動情報やニーズを得ることなどを目的として長浜市立木之本スティックホール(以下、スティックホール)を訪問したのが始まりです。「障害のある人に対する取り組みを始めたいけれど、どう始めたらいいかわからない」と、加藤さんが悩んでいる頃でした。「いいタイミングでアイサが来てくれた」と、訪問した際には自身が目指す「誰もが気軽に参加できるコンサートづくり」について熱く語ってくれました。その後、アイサ大学の舞台芸術コースにご夫婦で参加。研修での気づきをすぐに新たな取り組みにつなげておられる加藤さんに、改めてお話を聞きました。

芸術の魅力を感じ取る力は誰にでもある

2020年の秋に加藤さんはある福祉施設と出会い、そこに通う知的障害のある人たちをス

ティックホールのコンサートに招くことになりました。「公共ホールとして障害のある人の利用を増やすのは使命」だと考えていた加藤さんですが、障害のある人の鑑賞は経験がなく、どうすれば楽しんでもらえるのかわからない状況でした。そこで、施設職員にどんなサポートが必要かを事前に確認したり、演奏者にも障害のある観客がいることを伝えて、演奏する曲についての説明をしてもらうようお願いしたりして、本番を迎えました。

手探りのなか開催したコンサートでしたが、「障害のある人たちはとても集中して聴いておられて、すごく感動していた」そうです。また、「芸術は言葉や理屈では捉えきれない魅力がたくさんある。それを感じ取れるかどうかは、障害のあるなしに関係ないことを改めて知らされる経験だった」と加藤さんは言います。

鑑賞の機会をつくることから

加藤さんは、障害のある人が文化施設を利用する機会を増やすために、障害のある人がどのようにホールを利用しているのかを調べてみました。すると、演じる人、舞台に立つ人に向けた情報は多く見つかりましたが、鑑賞する人に向けた情報が少ないと感じたそうです。

加藤さんは、子どもの頃から音楽が好きで、学生時代にたくさんのコンサートに通って音楽を聴く喜びを体験してきました。その経験から、演奏者など表現を発表することだけでなく、「鑑賞することから得られるものはたくさんあるので、聴く体験こそしてほしい」という思いを強く持っています。そのような思いもあり、加藤さんは情報が少ないと感じた障害のある人の鑑賞の機会をつくらうと動き始めました。

ところが、それまであまり障害のある人との関わりがなかったこともあり、どこからアプローチすればいいのかと、加藤さんは考えあぐねていました。アイサが訪問したのは、ちょうどその頃です。アイサの取り組みを知り、自身の活動とのつながりを感じてアイサ大学にも参加。「障害のある人が利用するにあたり、ホールとしてどのような準備が必要か。不安もあるので知識を得たかった。妻は小学校などで読み聞かせをしており、そのなかで障害のある子どもたちとも接するので一緒に参加した」と参加のきっかけを語ってくれました。

「アイサ大学に参加して、障害のある人の舞台芸術について学びたいという人が、県内にこんなにたくさんいると知り刺激をもらった」と話す加藤さん。視覚障害のある講師の発言や、障害のある子どもを持つ受講生との出会いも印象に残っていると言います。4回にわたる研修を受講するのと並行して、加藤さんは視覚障害者を自

身が企画したコンサートに招待するという初めての試みに取り組んでいました。

失敗はあるかもしれないけれど、まずはやってみる

最初は どうやって目の見えない人に情報を伝えたらいいのかわからない状況だった加藤さんですが、滋賀県立視覚障害者センターに問い合わせると音声を読み上げて伝えられるのでテキストメールでよいとわかり、「目からウロコだった」と言います。早速、メールで案内を送ると、2回のコンサートにそれぞれ10名ほどが来てくれました。

加藤さんは来場した視覚障害者に、どんなサポートが必要か直接尋ねてみました。すると、付き添いの人と2人分のチケットを负担していること、他の観客に視覚障害者がいることを伝えてほしいことなどを話してくれたそうです。「視覚障害のある人とお話ししたのは、あの時が初めて。直接話聞かないとわからないことがたくさんあった。研修に参加したり、視覚障害者の人をご招待したりしてみても感じたのは、失敗するかもしれないけれど、とりあえずやってみればいいということ」と手応えを感じています。

コロナ禍に立ち上げたエンモ・コンサーツの活動について、「コンサートをつくる仕事をしていると人と人との縁を強く感じる。演奏家と聞き手をつなぐことが仕事だし、演奏者同士のつながりもある。ホール連携などもやっていきたいし、地域の間や人とのつながりもどんどん広がっている」と話します。また、今後は「障害のある人だけでなく、施設で暮らす高齢者など普段コンサートに行く機会が少ない人たちに、鑑賞してもらい機会をもっと増やしていきたい」と意欲的に語ってくれました。

令和3年度アイサ事業報告書

2022年3月31日発行

[制作・発行]

アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター

社会福祉法人グロー(GLOW)～生きることが光になる～

法人事務局芸術文化部

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837-2

TEL 0748-46-8118 FAX 0748-46-8228

E-mail artbrut_info@glow.or.jp

WEB <http://info.art-brut.jp>

[発行責任者]

牛谷正人(社会福祉法人グロー(GLOW)理事長)

[執筆]

松井裕紀、山口有子

(社会福祉法人グロー(GLOW)法人事務局芸術文化部)

[編集]

辻並麻由(p24～31執筆)

[デザイン]

上川七菜

[イラスト]

洞智子

[助成]

令和3年度障害者芸術文化活動支援センター運営費補助金(滋賀県)

